

# うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより  
第35号  
2019(令和元)年11月26日  
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

## 学際領域に属するもの — 草木染め：染色という現象 —

これまでに木綿庵で取り組んだ草木染めは13種類になります。アイ(藍の生葉)、イチイ(一位の小枝)、カキシブ(柿渋。青柿)、カリヤス(苧安の穂)、カリン(花梨の青葉)、ギンバイカ(銀梅花の実)、クサギ(臭木の実)、クリ(栗のイガ)、サクラ(桜の落ち葉)、セイダカアワダチソウ(花)、ビワ(枇杷の葉)、フクギ(福木の葉)、ベニバナ(紅花の花びら)です。染める素材は、すべて木綿。ハンカチ、ストール類は白の既製品を購入します。糸は自分で紡いだ手紡ぎ糸を用います。初めて取り組んだのが2017年の11月で、イベントとしての草木染めは今回で5回目になります(本誌12号参照)。回を重ねるにつれて、草木染めのおもしろさと難しさ、奥深さにますます魅せられるようになってきました。

植物性染料(天然染料)は、動物性繊維(タンパク繊維)には入りやすく、植物性繊維(セルロース繊維)には容易には入りません。動物性繊維とは生糸や羊毛のことで、植物性繊維とは木綿や麻などを指します。このこと自体はどのテキストにも記されていますし、経験的にもすぐに納得することができます。したがって、植物性繊維を植物性天然染料で染めるには、前処理が必要になります。タンパク質を付着させる工程で、かつては呉汁(ごじる。大豆の搾り汁)が用いられていました。木綿庵では豆乳を用いて前処理をおこなっています。また、発色と定着を促すための媒染をおこなうに際し、媒染剤にはできるだけ椿灰か藁灰の灰汁(アク)を用いるようにしています。

ところで、同じ豆乳を用いて前処理をおこない、同じ植物で染液を採り、同じ媒染剤を用いて染めてみても、必ずしも毎回同じ色に発色するわけではありません。「同じ植物でも採取された時期や採取されてからの経過期間と条件によって色素の化学構造や量が変化したり、また当初は色素でなかった物質が色素化していたりすることもありますので、同じ植物を同じ方法で染めたのに色調や濃さが違っていたということもよく経験するところです」(木村光雄『自然を染める—植物染色の基礎と応用』木魂社 75頁)と記されているとおりです。さらに、1年、2年と経つうちに褪色が生じますが、褪色による色の変化も一様ではありません。その化学変化の基本を知りたいと思えば本を読んでみても、けっきょくのところよくわかりません。要は「…染色の基礎理論なのですが、染色という現象は幾つもの学問分野が重複した学際領域に属するもの」(前同書33頁)のようで、素人が簡単に理解できるものではなさそうです。

それでもやはり、ある程度の理論は理解した上で、これからも経験を積み重ねていきたいと思えます。

さて、植物の灰からつくった灰汁(アク)には、一般的にはケイ酸カリウムが多く含まれており、アルカリ媒染となります。灰：水=1：10でPHが約11~12(前同書81頁)。ところが同じ灰汁でも、椿灰の場合にはアルミニウムイオンが特に多く含まれているため金属イオン媒染(アルミ媒染)となります。この点に関して、金属と金属イオンとは全く別物であることを知らずに、つい先日まで椿灰から作った灰汁を放置しておくと、「アルミ成分」が沈殿してしまい劣化するものと思込んでいました。これでまた一つ、学ぶことができました！



左から藍、紅花、苧安、花梨、銀梅花、一位

----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和元年10月24日~11月23日)  
福島県1、広島県1

【H.A.M.A.木綿庵】(令和元年10月24日~11月23日)

メールを含む各種相談件数4、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数2件3名(収穫祭除く)



## 《木綿庵 収穫祭2019 — 綿摘み&草木染め体験 — 令和元年11月3日》

午前11時より1号畑にて開催。参加者は15名。まず綿摘みの要領を説明し、綿摘みを体験していただいたのちに、草木染めに取り組みました。

今回は花梨(カリン)の葉と、銀梅花(ギンバイカ)の実の2種類でおこないました。媒染剤には椿の焼却灰(アルミ媒染)と藁灰(アルカリ媒染)を用いました。なお、準備していた荊萱(カルカヤ)は、段取りの上から手が回らず実施することができませんでした。

草木染めのおもしろさは、思ってもみない発色に出会うことがあることで、今回は銀梅花(ギンバイカ)の実からアルミ媒染で紫色に染まると説明していたにもかかわらず、皆さんの目の前で薄緑色に発色して、一同の口から驚きのため息が漏れました。去年は、たしかに鮮やかな紫色に染まったのです。また、カリンもピンク系の色に発色すると説明していたにもかかわらず、オレンジ系に発色しました。化学反応の仕組みはわかりませんが、様々な条件の微妙な違いが発色に影響を及ぼすようです。

ちなみに、翌4日にあらためてギンバイカとカリンで染めてみました。すると今度は昨年同様、紫色とピンク系色に発色しました。草木染めのおもしろさと難しさを学んだ一日となりました。ご参加くださいましたみなさん、ほんとうにありがとうございました。写真中央：ギンバイカ、右：カリン。



## 《綿の栽培記録 2019》 — 平成31年(令和元年)度版 その10 —

11月も下旬を迎えたというのに、綿畑ではまだ咲いている花があり、新たにはじけている綿の実があります。特に洋綿は10月下旬～11月中旬にかけても次々とボールがはじけ、良質の実綿を収穫することができました。和綿と洋綿とでは、収穫盛期に明らかな違いがあるようです。

和綿の収穫盛期は9月中旬～10月初旬。洋綿の収穫盛期は9月下旬～11月上旬。本年の場合です。

### 【綿の加工の作業記録】 (梅田1人の作業量)

- 糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：平成29年, 2017産。丹羽正行氏による打ち綿)  
10月24日～11月23日 (作業実日数31日) 糸の総量63.4g (16.9匁) 総時間213分 (2時間33分)  
※1分間≒0.298g 1時間≒17.9g (4.8匁)

### 【研修等の記録】

- 令和元年10月27日「八尾市立歴史民俗資料館」(大阪府八尾市千塚)訪問。施設隣地の綿畑を見学。
- 令和元年10月27日「高安農空間づくり協議会：神立農地」(大阪府八尾市神立)の綿畑を見学。
- 令和元年11月03日「H. A. M. A. 木綿庵・収穫祭—綿摘み&草木染め」実施。
- 令和元年11月10日「相楽木綿伝承館：機織り教室-専科」(京都府相楽郡精華町)受講。巻き取り。  
(下段の写真は、八尾市高安農空間づくり協議会さんの神立農地の綿畑と綿の実です。2019.10.27撮影)

